

浄土

八月号



法然上人鑽仰会

昭和二十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別取扱郵便第三五二号)
昭和四十四年七月二十五日 印刷
昭和四十四年八月一日発行

第三十五卷

第八号



目 次

表紙「蔬菜」松涛達文画

三遊亭円朝とエゾの一行院.....	須藤隆仙.....	(2)
私の座右銘.....	稲岡覚順.....	(6)
宗祖法然上人二十五霊場をめぐって ①	村上博了.....	(8)
シルクロードとコーカサスへの旅日記 ③	佐藤治子.....	(12)
十二因縁 ⑧ 恩愛のきずな(愛)	渋谷賢応.....	(17)
ラムゼイ父子.....	細井善隆.....	(20)
ハガキでひとこと 暑さと私の健康法.....		(24)
仏事の心得とお作法 ③ お焼香について.....	福西賢兆.....	(25)
ひとくち伝記 ⑨ 南洋に寺を建てた惠薫尼.....	高橋良和.....	(28)
鏡 額.....	合田微雪.....	(31)





今月のことば

「暑苦しい長い夏がやってきた」とは、いまごろアメリカ人がよく交わす言葉です。人種問題が複雑な様相を呈しているアメリカでは、暑い夏を迎えると、そうでなくても、いらしらがちな気候のなかで、感情をむきだしにして、欲求不満が爆発することが度々おこるのです。そこには、人間お互同志のなかに不信感が宿っているからでありましょう。

洋の東西を問わず現代は不信の時代ということもできましょう。「信ずること」、これは現代において、もっとも要求される大切なことといえます。

人間関係の基調をなす信を回復することは、まず、不信感をもっている人間同志からはじめるのではなく、信じうる如来の誓願を通じて、はじめて養われるものなのです。

「本願に乗ずることは、唯だ信心のふかきによるべし」

と法然上人はおしえられています。その本願の中心となるものは、至心と信樂と欲生の三つであります。

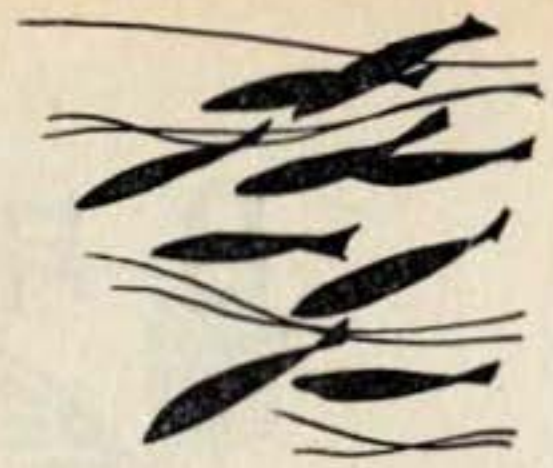
まごころで

深く信じて

浄土をのぞむ

この心状は、自然に「南無阿弥陀仏」と如来を念ぜずにはおられなくなるのですから、こと更むずかしいことではなく、信ずるものにとつては、きわめて自然な事柄なのです。したがって、そうした気もちと氣もちからでる念仏とは、ただちに、如来の本願にピッタリ適応するものといえましょう。

念仏を通して、信ずることの尊さ、すばらしさを味得して、心に涼氣を味わいたいものであります。



三遊亭円朝とエゾの一行院

須藤 隆仙

(北海道函館市称名寺執事)

三遊亭円朝といえは、落語家で人情話に通じ、しかも自作の有名なものが多く、この世界では傑出した存在でした。この人の「牡丹灯籠」「真景累ヶ淵」などは、とくに有名であります。

さてこの円朝と、かつてエゾ地(北海道)にあった一行院という浄土宗の寺との因縁について、少し紹介しておきたいと思ひます。

明治十九年夏のこと、ときの内務大臣山県有朋と、外務大臣井上馨の二人は、夫人同伴で、しかも一行二十五人という大名行列のような態で、北海道へのり込んできました。北海道視察旅行というわけですが、ときがときだけに(八月)、官費の避暑旅行だったことは間違いなく、いつに変わらぬ役人の役得といったら、聞えが悪いでしょうか。

さて、これらの大名行列のなかに、当時すでに有名になつ

ていた三遊亭円朝が加わっていたのであります。つれづれの慰めに、こういう芸人まで連れてあるいていたのです。

円朝という人は、たいへんな勉強家です。明治新時代に相應しいように、「安中草三」や「塩原多助」のような、社会実益的なものを自作自演したり、はてはモーパッサンの作品から翻案物を生み出すという次第で、それはたいへんな努力をした人でした。落語家の地位を向上させたのは、じつにこの人の力でありました。

そんなわけですから、北海道旅行中も、いろいろ周囲の事物に氣をつけて歩き、帰ってからは「蝦夷錦古郷の家土産」(明治十九年)と「椿説蝦夷なまり」(同二十九年)との二つの作品を発表しました。もちろん北海道に取材したものでした。

この二つの作品は前編、後編の続きものになっているもの

で、後者のほうには、明治初年の北海道が面白く描かれているのであります。

そのなかでとくに興味があるのは、ここに一行院という北海道の浄土宗の寺が出てくるのであります。作品では一行庵となってますが、これは作品上のことでありまして、モデルになりました寺は、一行院というのであります。（以下煩雑にならぬよう、一行院の名で記述をすすめましょう）

円朝の作品の内容は、ざっと次のようなものであります。神田三河町に島村お録という娘がいるが、安政の大地震で焼け死ぬ寸前を、穢多の喜三郎というものに助けられる。お録と喜三郎は出奔するが、喜三郎は大病にかかり、お録は遊女に身を売る。お録はそれから転々とするうちに、孤児のお桂という女を知り、そのお桂が気絶したとき、死んだものと思ってその遺品を盗み、本人に化けて親類の資産家に入り込む。ところが死んだと思っていたお桂が現われたために化けの皮がはがれ、騒ぎとなるが、縁類の綾川信夫というものに救われ、二人は出家をして、信浄、妙林、と名のり、尼の姿でエゾ地に渡り、峠下村の一行院にはいつて仏に仕える。

ここからまた話が転回して、箱館戦争の幕軍の戦死者、春日左衛門の部下で室田信平なるものが、春日左衛門から預

った金三百両を持って一行院に隠れたことがある。明治十一年正月、春日左衛門の娘でお嘉代というものが、江戸に住んでいた頃の女中お仙を連れて、この一行院にき、この二人もまた尼となつて、お嘉代は春声尼、お仙は真念尼と名のるのである。春声尼はやがて札幌に出て寺を開くことになる。

この間にいろいろの人物が登場し、北海道名物の熊が出てきたり、さまざま面白いことがあるのですが、大要はざっと右のようなものです。ところで、円朝が、よほど氣にいったとみえて、北海道の数あるお寺のなかから、とくに抬いあげて作品のなかに入れておりますこの寺、一行院はというに、いまは現存しておりません。記録の上やなにかで、徳川後期から明治初年にかけて、存在したのはたしかなのですが、以後中絶して、あとかたもありません。

北海道苫前郡苫前町の豊国寺に、『蝦夷新寺十三箇寺開山定草』という文書が所蔵されておりますが、それによりますと、峠下一行院について、大略次のようなことが書かれております。

開山は有珠善光寺四世麟誉上人で、文化年間火災のさい、一院を峠下に建てて避難し、一行院と称した。また三田魚籃寺住職の徳道上人は、安政四年六月、増上寺録所からエ

ゾ地新寺勸進を命ぜられ、随伴六人と出立、峠下の一行院を本部として活躍した。そして山越内やまこしな（いまの八雲町字山越）に一寺を建てるべく奔走中、病いにかかり逝去した。

ときに安政五年十月二十八日。

人々は遺命により、これを一行院に葬った。以上のようなわけで、一行院という存在は明瞭なのであります。しかしその建っていた場所や、廃絶された年代が明らかでなかったため、私は長い間これを調べてまいりました。

ところが最近、この寺のあった場所をつきとめ、また右に出てきた魚籃寺の徳道上人の墓も発見し、さらには円朝がモデルにした二人の尼僧の墓も発見することができました。

これは全くうれしいことで、仏天のお力添えと喜ばずにはられません。

いまこれを見つかるまでの経緯については省略いたしますが、峠下というのは、函館から国道五号線を約二十キロばかり北上したところで、いまは七飯町ななえ字峠下となっております。この付近に水力発電所があり、一行院はその近くにあったのでした。

一行院がいつごろ廃絶したかの調査は、近年のことでありながら、なかなか困難です。明治三十四年の教区の記録をみますと、一行院は載っておりませんから、この頃はすでにな

かったのです。しかし円朝が渡道した明治十九年頃にはあったわけがあります。

ところで話が前後しますが、現在、峠下というところには、明林寺という曹洞宗の寺があります。この寺をいろいろ調査したところ、これが一行院の後身であることがわかりました。明林寺の記録では、明治十九年に、内山明林と名のる五十四才になる尼僧が、越後三島郡東谷村から三名の尼弟子をつれてきて住み、その後井上月橋という僧があとを継ぎ、明治二十九年に明林寺と称したといっております。結局、明林という尼僧が曹洞宗だったために、一行院は曹洞宗に変えられ、寺号も明林寺となってしまったわけがあります。

そして、この明林寺の裏の墓地を探したところ、ちゃんと一行院に住した徳道上人の墓があるではありませんか。これで明林寺が一行院の後身であることが、なお一層はつきりしたわけです。ただ明林寺になってからも、昭和三年に火災で全焼しており、一行院時代からの仏具など何もありません。場所も当初の一行院の場所から、少し離れたところに明林寺が移築されております。

しかも面白いことには、徳道上人の墓の隣りに、もう一基の卵塔があつて、これには中央に「当院中興達道戒順上人」とあり、その両側に「夏月妙光禪定尼」「頂受妙法禪定尼」と



(発見された徳道上人の墓)

いう二人の女性の法名が刻んであるのです。その裏に年号が刻んであるのですが、文久二年（一八六二）と確認されるものがあります。徳道上人のものは表面中央に「徳道和尚塔」とあり、裏に「安政五戊午年十月二十八日」「江戸三田魚籃寺住」とあります。

ここで考えられるのは、円朝は明治十九年に一行院を訪れ、そこでこの徳道上人や、中興と二名の女性の法名を刻んだ墓を見たと思われるのであります。そこに作家独特の興味がわいて、この二名の女性が、前記小説の、二名の尼僧となつたと思うのであります。二名ずつの尼僧が二度登場するわけですが、おそらくこの二名の女性の法名が、円朝の脳裏に

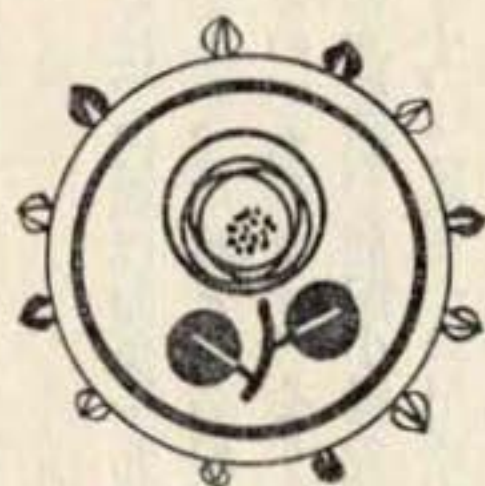
そうとう強く焼きついたものでありましょう。

徳川幕府は、北方からのロシアの進出を防ぐため、その警衛兵士の拠点として、エゾ地に三つの官寺を建立しました。文化元年（一八〇四）のことで、これをエゾの三官寺といっております。そのなかの一つに、浄土宗の善光寺があり、有珠（いまの有珠郡伊達町字有珠）というところに建てられました。そこには増上寺で推挙した僧が派遣されて、アイヌの教化をはじめ、いろいろの役目をはたしました。この善光寺は、たくさんの末寺を建立しましたが、峠下の一行院もその一つでした。

この一行院が、このごとく三遊亭円朝の戯作に登場するのは、まことに興味あることといわねばなりません。

一行院はおそらく、明治十九年に円朝がきて間もなく、越後から明林という尼僧がき、浄土宗ではなく曹洞宗になってしまったことでありましょう。したがって、一行院の存在は明治十九年までとみて間違いないようです。なお先きの豊国寺文書によれば、一行院は善光寺四世麟誉上人が文化年間の火災のさい、峠下に寺基を定めたとありますが、文政年間の誤りのようです。つまり文政の頃から、明治十九年頃までの存在とみるべきでしょう。単に北海道の地方史上だけでなしに、浄土宗史の上でも注目すべき存在だと思ふのです。

私の座右銘



稲岡 覺 順

(埼玉県川口市在住)

座右銘を挙げて解説せよ、との指示を頂きました。たゆみがちの私の日々を、いつも励まして下さるのは、縁山稚尾弁匡法主の

時はいま、ところ足もと そのことに

うちこむいのち、とわのみ生命

の一首です。この歌の含む教えを私なりに考えさせて頂きます。

実はこの歌の第三句目の「そのことに」は「このことに」とした方がより切実な様に考え私はかつて法主にその点をお尋ねした処、どちらでもよい、との仰せでありました。

その際この歌をお詠みになった由来も承り、矢張り「そのことに」でなければならなかったことを知り、自分のさかしらを恥じた次第であります。

この歌はあの苛烈な大戦争の砌、特攻隊として出陣する一学徒に対し、法主がはなむけとして、お贈りになったものでありました。

若い学徒は、法主の教を体して、美事散華されたことでありましょう。然しこの学徒のその折うちこまれた生命は、所謂「とわのみ生命」として、今も尚私共の心に、そしてお国の生命の中に、脈々として生き続けておることを、確信いたします時、この歌の含む教訓に、一入胸うたるるものを感じます。

人のいのちは食事の時、むせて死ぬることもあるなり。と法然上人もお示しになっておられる様に人の世は誠にはかないものです。私共はいつも死縁に対決し、死の万縁の中にさらされている、と言っても過言ではありません。

このはかなさの中にあって、私共の日々は果して、どのような生き方をしていることでしょうか。

総てが「生きそこね」であり、「ねむりの生活」であることに気がつきます。

私などは齢すでに六旬を越えましたが、過去を反省します時、すべてが「生きそこね」の連続であることに気づかされ恥かしさに堪えません。

余命いくばくもないことは判りますが、せめて許される余

生だけでも、真実に生き貫きたいことを念じています。

過去はとり返しのつかない、生きそこねであった。そして未来は、一瞬先の生命の保証ありません。

このぎりぎり結着の断崖に立つ時、私の生命とか、私の人生とかは、今比処に、許されて生きている。この瞬間をおいて、他にないことを知るのであります。

人生五十年とか、七十年とか申しますが、要するに「今」「今」の連続であり、一瞬一瞬のつみ重ねであります。

人生とは結局、「今」「この場所」「この事を」の連続でありますから、「今」「この場所で」「この事に」真剣にうちこんでゆく以外にありません。

かく考えます時、法主の示される、

時は今、処足もと、その事に、打ちこむ生命

の尊さに気がつきます。この姿こそ、私が生きる唯一の生き方であり、この生き方以外に、私の生命はありません。いつでもどこでも、より真剣により真実に、うちこんでゆく態度こそ、人生を本当に生き貫く姿であります。

今、ここで、このことに、といつも全身全霊をささげつつ、最後臨終の夕まで、真実に生き貫く人生ほど、尊いものはありません。

生身は滅しても、真実に生き貫いたその人の業績は不滅で、永遠に輝き続けるものであることを確信します。

法主からこの励ましを受けて、従容として散華した、青年学徒は勿論、大戦争の犠牲となった将兵は何百万を数えます。

今や日本の復興はめざましく、今日の隆昌を将来しましたが、この平和や繁栄こそ、実にこの幾百万の英霊の支えの中に、ある事実を忘れることは出来ません。

戦場に散った幾百万の将兵の生命は、脈々として、再生日本の中の生命の中に、生き続けておるのであります。

「うちこむ生命」こそ、そのまま、「とわのみ生命」であった訳です。

この不朽の生命を、私共は霊と拝み、阿弥陀様のお生命と頂くのであります。

人生の終着駅はいつくるか。それはただみ仏のみが御存じです。何事もあなたまかせでよいのです。

人事を尽して天命を待つのです。

いつでも、どこでも、念仏の中に、自分に与えられた仕事に恵念する態度が、そのまま本当に生きる姿であり、法主のこのお歌の精神に順応する生き方と、頂く次第であります。

人 上 然 法 祖 宗

二十五霊場をめぐる(一)



村上博了

一
浄土宗宗祖円光(和順)大師法然上人には二十五霊場又は四十八霊場があつて、昔からあまた篤信の人々により、巡拝されていた。私はここに二十五霊場等を巡拝して、上人の宗教が現在も尚その地住民の実生活の中に深く根を張り、生活の支柱となっているものが少くないことを痛感したので、その一端をお伝えしたい。

二

結婚は人生の花であつて、こんな芽出たいことはない、又

節句も人生に欠くことができない「うるおい」でありあたたか味を加える芽出たいものである。

前者にも後者にも高砂の絵や人形がお祝される。殊に古式豊かな結婚式には、高砂の床かけは又欠かせない。三三九度のかための盃ごとがすむと、うたい高砂が吟ぜられる。桃の節句の床飾りは又高砂の人形や軸がお祝いされる。高砂の絵なり人形には、白髪の老夫婦と松の大木がある、ともに白髪まで夫婦揃つて長寿を保ち行くことが念願され、祝祷されるからである。よいものである。

そもそもこの高砂のお祝は、いつの頃から始められたものであらうか、誰が教えたものであらうか、ということが、お祝の席の人々の間で話題となることが珍らしくない。

私はかつて上人の二十五霊場等を巡拝して、法然上人七百五十年御忌(御遠忌)大法要に、そのみ教のあとをあまたの人々に偲んでいただき、御高恩報謝の資にいたしたいと、各霊場顕彰カラーズライドとその写真展資料を作成したことがあった。

その中で第三番札所高砂十輪寺祖師堂に参拝した時、堂前にある赤松が高砂松の三世ときいたのである。堂の正面には円光大師法然上人像と西山国師像が安置されていた。寺が西山派寺院であることより、法然上人が高砂松に因縁浅くない

ことに気付いたのである。

三

建永元年三月十八日昼下りの時である。法然上人乗船の小さな和船が、高砂浦に船がかりされた時のことであつた。

小さな和船にのつた老夫婦が、上人の船近くに漕ぎよせて法然上人のみ船とお見けいたします、お願いの者でございます

と申し入れたのである。近待の信空は、上人にお取次ぎする。上人は「これへ」と仰せられた。老夫は七十あまり老女は六十あまりの夫婦であつた。老夫が、

私はこの浦に住む漁夫八田治部大夫と申します、生れてこの年まで、毎日魚を捕つて生活をしています。ものの命をとる、殺すものは、地獄におちて永遠にくるしみをうけ、その苦痛たえがたいと聞きました。私共夫婦はめぐる因果とやらで致方ありませんが、亡き父母がその苦るしみをうけるかと思うだに、いても立つてもいられません、いかがしたならば浮かばれましょうか、お教下さいませ。

と、いうにあつた。静かにきいていられた上人は、

なりわいとあつては、生業なので致方もありますまい、只面白いから殺るといふことであつてはなりません。これも世のため人のため許して下さい、南無阿弥陀仏南無阿弥陀

仏と合掌し念仏をとなえ、その菩提を弔うてほしい云々と教えられた。老夫婦は静かに合掌しうなずいて帰つていたのである。

四

翌日のこと、老父はいつものように、我が子や漁夫達と網を入れたのである。

手ごたえは充分で、銀鱗は波を染めて大漁であつた。その時かの老人は、船先に立ち上り合掌して南無阿弥陀仏と大音声にお念仏を唱え初めたのである。念仏の声は海上遠くまで朗々としてひびきわたつた。息子達はいつもと違う父の様子を、じつと見聞していたのである。家に引き上げて一息入れる。息子達はなにか相談していたようであつた。

翌日息子達は老父の前に揃つてすすみいで、

お父さん、お願いがあります。おきき入れ下さいませ。私共は昨日まで、なんの気なしに、お父さんと一緒に漁に出ましたが、昨日のお父さんの念仏の声で、これは大変、老いたる父親を船子一枚下は地獄である荒海ではたらかせる。万一の事があつては申訳がない。家業の方は私共にお委せあつて、今日より余世（生）を静かにたのしく、お送り下さいませ。

と、申し入れた。その承諾を得て、十輪寺境内の赤松の所

に、ささやかな隠室を造り、毎日出漁の合間をみては、兄弟一同うち揃って父母によく仕えたのである。

老夫婦は心から喜んで子息たちの「まごころ」孝養をたのしまれた。

五

人生は明日を期しがたい、上人も「人の命は、食事の時、むせて死することも有るなり。南無阿弥陀仏とかみて、ナムアミダ仏とのみ入るべきなり」と仰せられる、無常の風はいつくるか全く判らないのに、治部大夫夫妻は揃って長寿を保ち、自身の後世と亡き父母の回向が出来子息達の孝養を得たことは、本当に理想の生活であり、人生無上の幸福である。誰もかくありたい。殊に結婚という人生の一大事に当たて、かくあらんことを祝祷し実現いたしたいとする願望は誰も異議のないところである。その願望が高砂となったのである。

しかしその根底となり中心となつてゐるものは、法然上人のすすめ給える口称念仏であつた。時は流れて念仏のことは全く忘れられ、人生願望の姿が祝ものとして生活様式の中に生きた訳である。仏教はかくありたい、上人の徳化は誠に宏大無辺、いわば太陽のように偉大であつた。

現在五十年目ごとに、天皇から上人に大師号を贈られる。

昭和天皇から和順大師号をたまわつたことも、決して偶然のことではない。

老夫婦は、毎日毎日が楽しく、上人のみ教をよく守つて、終日終夜お念仏すること、

あたりの人も、おどろくばかりなりけり。つねに臨終正念にして往生をとげるよし

と勅修御伝に伝えられている。まさしく三心具足の但心念仏であつた。夫妻の往生は、亡き両親も又功德を得てめでたく往生した証拠である。この高砂浦の撰化は諸伝に「人多く結縁」と伝えて、盛んなるものであつた。上人の口称念仏が如来の御本願と開拓された上人の尊さがある。十輪寺は古く地藏菩薩の霊場であつたが、上人の徳化を慕うて参拝結縁する人々跡を絶たず霊場として栄えたのである。

六

御詠歌は

生れては 先ず思い出ん 古里に

ちぎりし友の 深きまことを

という上人のお歌である。ここにいう古里ということは西方極楽世界のことである。浄土三部経(一)の阿弥陀経に

舍利弗口衆生きかん者は、まさに発願して、かの国に生ぜん
と願ずべし。ゆゑはいかに、かくのごとき諸の上善人と共

に、一処に会することを得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁をもつては、かの国に生ずることを得べからずとある。

大利無上の功德をつむということについて、上人御法語に經に、一たび名号（念仏）を唱うるに、大利を得とす。又すなはち無上の功德を得と、とけり

と仰せられている。口称念仏は無上功德大善根である。余の善根とするものありとするも、お念仏にくらべると少善根である。念仏以外の善根では仲々に西方極樂世界に往生するとはむずかしい。お念仏は阿弥陀如来の御本願、一心にとなうれば、その本願の有難い功德によって往生することができ

る。上人がかつて極樂にあつては、人界に生れたならば、極樂に於けるあまたの友人と、口称念仏をあらゆる人々にすすめて、男女老若をとわず、往生されるよう伝道に精進せんとする「ちぎり」を、思い出し実行せんということ指したものである。人と生れることは大善根をつまなくては出事ない、御法語に「うけがたき人身をうけて、あいがたき本願にあいて、おこしがたき道心をおこして」とある。一念大利の念仏をと

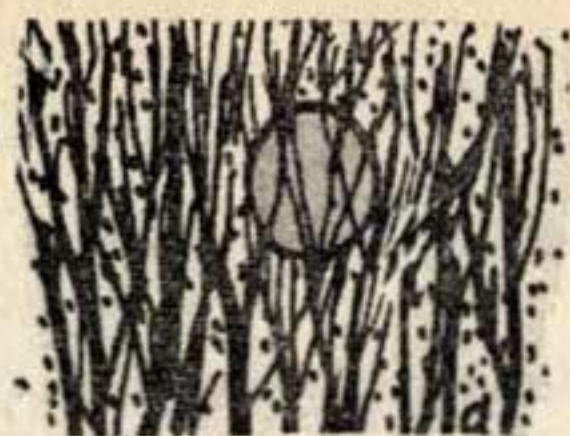
七

さてここに一つの問題が残る。それは国宝重文となつてゐる鎌倉時代の餓鬼草紙に見られる因果のことである。例えば魚肉の好きな人、又それをとることが好きな人は、いよいよ無常の風が吹いて、息も絶えだえとなり、苦悶の状況が見える頃となる時、すごい大魚又は怖ろしい形の大魚などが、その人の眼の中に現れて、まさに喰いつかんとする。こわいで逃げようとものがく、身体が自由がきかない、一層のことパクリとやってくればよいものを、今にも喰いつかんばかりに、その人を苦しめる。又は、肉好きの人が、大鳥や獣に追いまわされて、その苦るしみは、たとえようがない。兄弟や知人が床のまわりにいても、どうすることも出来ない、地獄のくるしみである。

この因果応報絵に見られるように、魚をとるものがわるいか、食べる者がわるいかということである。

上人御在世の当時も、かような話は少くなかったものと見える。

ある時人々が、後世のことについて、さまざまに論じあったが、上人は 要は本願の念仏を、扶けたまえる南無阿弥陀仏と唱えることである、とされたのです。（つづく）



△第三回▽

佐藤 治子

シルクロードとコーカサスへの旅日記

「タシケント」

三月二十六日。何だかヒヤヒヤと寒い。まだ六時前なのに寒さで目がさめてしまった。カーテンを引いて外をみると雪がまだずい分残っている。道路をへだてたすぐ前にサーカスの小屋らしいテントがある。固型燃料に火をつけお湯を沸かしお茶をのむ。おいしい。今日はタシケントの市内見物。おながすいて朝食が待ち遠しい。燃料はなるべく節約しなくてはとオヤカンをさげて食堂へ行く。例の大衆食堂を通りぬける。勤め人か労働者か皆テーブルをかこんで食事をしていく。オヤカんと、そしてどこの国の人かともいいかげん顔であちこちのテーブルについている人達がジロジロ見ている。そこを通って私達泊り客の食堂へ行く。ウェイトレスも

ボーイも大衆食堂とはちがい一般のホテルなみである。

タシケントはロシア・インド・パキスタンに通じる中心であつたろうし、現在はモスコ・コーカサス・シベリアへの鉄道の中心である。そのみならず飛行機で飛ぶとしてもモスコ・ノボシビルスク・印度のデリー。日本からソ連へ入るにもここタシケントを通過しなくてはならない、いわゆる南の玄関口である。

夏は非常に暑く四十三度位まで昇り、冬は平均零下一度位の寒さだそうである。砂漠の中のオアシスが現在は遺跡も少ないし、特に一九六〇年の大地震で倒壊した家屋の後は未だ荒れたままになっている所もある。市内は新旧に分れていて新市内にソ連の全力を集めて建設したというアパートの町と



タシケント
—パラカン回教学院の前で—

いえるアパート群はおどろきである。日本の団地がすごいとおどろいていた私達はアパート団地なんて日本で見られると
いって喜びもなかったが、この見物はだんだんとバスが進むにつれおどろきに変ったのである。

サマルカンドにかわってウズベク共和国の首都になったここでは全く今まで会ったソヴィエト人の顔つきとはガラリとちがいが、男の人達も黒地に白でシシュウをしたトルコ帽に似たものをかぶっている人が多い。イラン系のタジク人だそうである。ウズベク人はトルコ系。日本人のような顔をしている人もいる。女の子といっても二十位までの子達は眉毛も濃く目は明るくかわいい顔をして、風俗も色とりどりのスカ

ートををはき、シシュウをした大きなスカーフで頭から肩へとまきつけている。人種の数はいくつもありチベット人、韓国人、行きずりの人達の顔々々をみていると我々とどこか通じるものがあり恥かしそうにあるいはニコツと笑ってくれて何となく親しみを感ずる。ここでは私達グループの人達は「ヴェトナム人か」ときかれること幾度か。異国の人らしい。しかも東洋人らしいと思うとヴェトナム人と思うらしい。「日本人なり」といいたくても言葉が通じない。「ジャポン」といったら「日の丸」の小さいバッチをみせたりしたけど、「いやになっちゃうね」とあっちでもこっちでも「僕もいわれたよ」と皆ブウブウこぼしている。「ヴェトナム」ということは徹底して知っているらしい。

九時に二台のバスに分乗。市内見物に出かけた。ホテルの前の広場の向うにナヴォイ劇場が見える。両側の街路樹は今は枯木、その根元は未だ雪でおおわれている。道路は広く整備されているが雪どけの水がたまっている。

アジムさんという親しみのある顔つきの青年がこの土地のガイドとしてバスにのりこんだ。「英語で、案内しましょうか」ときれいな英語でたずねる。「日本語々々」といっせいに皆が答えたので、ロシア語で説明をし出す。ユーラーさんの丁寧な、きれいな日本語が流れはじめる。革命公園は樹木

が茂ったらどんなにかきれいだろうと思える程立木が多い。雪は未だ深い。駅の前を通ったり、グルグルと市内を乗り廻す。

クケリダシユ回教学院でバスを降り参観する。初めてみる回教寺院ではあるが大したものではなさそうだ。石段のわきの塀を二人の左官屋さんが修理している。日本の左官屋と同じだとはえみながらみていた。前通りは電車が走り往来ははげしい。向い側に土づくりの昔のままの住居がデコボコと並んでいる。白い土塀が印象的。一時にホテルに帰り昼食。三時より美術館へ行く。ここは大して興味がわいて来ない。ただ小学生が先生に連れられて一部屋々々見学しているのを見て、ソ連もこうして美術観賞の時間があるのだなとはえましく思った。美術館もよい。けれどこの町の人達、町でみかけるマトンを串にさして焼いている露店、荷物を肩にかついだり、わきにかかえて通るウズベクの人達の様子をみ、各人種を眺める方が興味深い。ヤキトリ屋のスタンド（ヤキトリではなくヤキマトン屋であるけれど）へかけて行って串ざしのマトンを試食している私達のグループの人もある。バスの窓より人種の差が見分けられる色々な顔の人々を見て「まるで日本人みたい」「あれは蒙古人だ」「あの人はトルコ人みたい」等々道行く人をあかず眺めていた。一様に

受ける感じはあたたかく親しみのある目、口もとである。これがみたかったのだ。私はうれしかった。何ともいえぬ満足感だ。日本ではとうてい考えられないそれぞれの人種の人達に今私達日本人も入ってこの一画の町を人種の見本市にしているみたいである。

六時の夕食後、寒い風をほほに受け広場をよこぎり向い側のナボオイ劇場へ行く。こういう事も旅行予定に組まれていたので絹の洋服を一着と会用のクツを一足もって行った事が役立った。男子はタキシードなどという事はない。ダークスーツ一着で事足りる。これは気らかな事である。ソ連のバレーといえは世界的に有名である。ここにもウズベクのバレエ団が一九四七年に創立されたという。久々にバレエをみる。バレリーナの身体つきが実に美しい。この劇場の正面ホールの横に六つのロビーがあり（各階に二つずつある）それぞれがウズベクの各地方の伝統ある装飾で天井も壁もかざられているという。時間の都合で一階の二部屋をみた。旅先きの事であり疲れすぎぬようにと、早目に帰ることにした。

タシケントはウズベク語で「石の都市」という意味だそうである。ホテルの一階ロビーはロビーというよりただの通路といった感じで石のままの床。これは固く冷い感じである。階段から上のロビーにはジュウタンが敷かれてある。エレベ



サマルカンド、バザールにて

れる。どのホテルもこのやり方である。通る人は皆ここで分るのだ。スチームも大してきかない部屋。毛布にくるまってねる。

二十七日。八時五十分に食事。十時出発。私達A班の一組は荷物をバスにつみこみ空港へ向う用意をしてホテルを出発。ホテルの前の両側の花壇らしき所に積った雪の上へ青いニラのようなものがツンツンと顔を出している。その真っ青な緑の草と真っ白な雪のコントラスト。何故か目にしみる感

じで忘れられない、雪のタシケントの一風景がある。

歴史博物館は一八七六年に建てられた。

。中央アジアの人類の骸骨。科学者に由り男の子だといわれた由。

。石版、昔の洞くつより出たもの。

。住居の模型、カルカラバキヤでみつけたものの模型で二五〇人位住んでいたらしいというもの。

。青銅器も多々あり。

。人型をした骨つば、風葬にして二ヶ月位たつとこの骨つばに入れる。

。仏像、クシャン王朝の時代

。イランの壁画、当時の服装がよく分るといわれる珍らしいもの。その他織物。陶器等あり。

これは博物館専属の説明者の婦人の説明をユーラーさんが訳したのを走り書きしたものである。

ここでも小学生の一団が入って来た。のぞいたり入ろうとしたりする学生達を「一寸待って」と戸を閉めたりして私達だけにゆっくりみせようとする番人の心づかいが印象に残った。写真もいくらでもとらせてくれる。もう少し時間があつたらよかったのに。けれど空港へ行く時間が来る。もう一晩ここへ滞在する二組の人達と暫しの別れの手をふり、空港へ

と向った。

タシケントの飛行場は南の玄関口というだけあって立派である。私達の待合所は一般の旅客とちがって、イントユーストの待合所でドルコーナーがある。ソ連の人形や陶器等が美しくかざられている。私達に両替で渡されたドルは八十ドルしかない。五百ドル渡されるべき所四百二十ドルは船・汽車・飛行機・ホテル・食事・バスの全費用に廻わされるのだそう、心細い持金である。綿のもようのついた小さい木ぼりのフタモノをみていると杉田先生が「それは面白い。綿の原産地であるし模様も色もこの辺独特のもですよ」とほめて下さるのに気をよくして遙々タシケントへ来た記念に買うことにする。

「切手」

ソ連の切手は実に立派で色とりどり、種類も多くそして大きいのおどろく。うっかり変ったデザインのをはると航空便にするのに三枚位はなくてはならない。絵はがきは割合に粗末なので絵の美しさに気をとられず「金高」を先に考えてはならないと宛名をちゃんとかけないことになってしまう。日本の普通の切手は百円のにしても小さく貧弱なのにくらべ、とにかくソ連の切手は切手の趣味のある人でなくても揃えて、かって帰りたい位種類が多く立派である。もう一つお

どろいた事はカードのかわいらしい事である。書いてある言葉は誕生祝いか、何か分らないけれど私は目につくと買う事にした。町の角にある新聞やパンフレットを売っている小さいボックスの様な所でみつけれられる。ソ連の風俗をかいいた実にはほえましい、しかも安くて買えるカードである。

「皆サーン、行きましょう」日本語はこれだけいえるエリナさんの号令で私達はゾロゾロと石の階段をおり、誘導する婦人のあとへついて飛行機への。一般の乗客はだまってみている。私達が席へおちつくとゾロゾロと後から塔乗する。観光客、そして団体優先である。この点は「ソ連よきかな」である。

飛行機はプロペラ。なるほど私達が一足お先に行くわけが分った。つまり五十人一度にのり切れぬ小さい飛行機なのだ。

飛行機は昔の姿をそのまま残しているというブラハへと向った。機上より砂漠が見えて来た。山の端が砂漠の砂の波に消えて行く。フワフワと二三度上下にゆれる。暫くすると水だまりが見える。オアシスなのだ。古い寺院があそこにも、ここにも見えて来た。一時間ほどでブラハへ着くのである。なだらかな丘が青い草におおわれているのが見えて来た。いよいよ空港へと下降していったのである。

十二因縁

—その8—



恩愛のきずな (愛)

渋谷賢応

(長野県茅野市心光寺住職)

六入より始まり有に至る愛欲の因果関係の中にあつて「愛」はその中心と申しても過言ではないと思います。それ程強烈な印象をもつのがこの「愛」でございます。長阿含大縁方便經にはさらにこれを掘り下げて九愛本と申すことが説かれているのでございます。

愛によつてそれを求める心が起る。求めることによつてそれを自分の利益に供せんとする心が起る。利益に供することによつてなおそれを自分のものにしなければならぬという欲心が起る。欲心が起ることによつてそれに執着

して離れまいと思う心が起る。執着することによつて今度は相手を、或は他を嫉妬する心が起る。嫉妬することによつてますますそれを我がものに守ろうとする心が起る。守ろうとする心は行動をとらなつて手段を選ばずそれを保護しようとする心に転ずる。保護しようとする心はついに刀杖諍訟、無数の悪を生み出す結果となるというのです。愛欲が悪に流転する公式を精細に説き明かされて余すところなしと思うのです。

そもそも愛ということばは、それ自体悪でもなければ煩惱でもないはずで、愛情といへば、人間の、いや動物の生きとし生けるものの、最も大切な要素であるとも言ひ得ましよう。それにもかかわらずお釈迦さまは、かくまでにこの「愛」を迷界の頭目に決めつけておられるのです。愛情はなければならぬものだや大切なものだ。生きとし生けるものの、その本能に結びついている生きるための源泉なのだ。それなるが故にまた恐いのだ。ぬき難いものなるが故にと、ねんごろに、ときにはくどく感ずるほど、くりかえしくりかえして諭されておられるのです。

実際、愛と憎とは裏腹なもの、愛あるが故に、愛情こまやかなるが故に憎しみも増し、また一面では愛そのものも、人の命と同じようなはかなさをもつていて、一定の

姿、形ではおられない無常さをあらわすものでございます。

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、愚かな人がありました。その妻は非常に美しい人でしたので大変愛していたのでした。ところがその美しい妻は自分の夫に対してまことの心がありませんでした。ふと知り合った男と交りを結び、たび重なることに邪淫の心をかき立てられてその男を追い求め、ついに自分の夫を捨て去ろうと思いました。そして召し使いの老婆に言い聞かせるには『私がこの家を去ったらお前は一人の女の屍をさがして来てこの家に置くのだよ。いいかね。そしてあの人が帰ったら言ってやるんだ。奥さんはお亡くなりになりました。これこの通りですとね』」

死体に着せる自分の着物を用意して老婆に渡し、自分は粧をこらして立ち去って行きました。老婆は言われた通りにして夫の帰りを待ちました。数日後帰宅した夫にその通りつげたのです。

『奥さんはお亡くなりになりました。これこの通りです』老婆に妻の着物を着せられ、もはや腐爛した女を見て夫は泣きました。そして屍が破れ落ちるまでそこを立ち去りませんでした。ようやくにして諦めた夫は薪をつみ、油を

かけてそれを焼き、骨にして袋に入れ、夜となく昼となく肌身はなさず持ちあるいていたのです。

一方、妻は男と暮していましたが、この不倫の生活は長続きしませんでした。性愛だけでは満足できなくなった妻はまた夫が恋しくなり家に帰って来たのです。

『あなた、今帰りました。私はあなたの妻なのです』夫はこれに答えて

『私の妻は久しい昔に亡くなってしまったよ。お前さんは一体誰だい。私の妻だなどと言い張るお前さんは』

と、妻が二度三度とそのことを訴えても信じようとはしませんでした。」

妻は情夫を愛するが故に、屍を用意してその夫をだましました。夫は変わることなくその妻を愛しつづけていたのです。その妻が帰って来たとき、夫は妻を愛するが故にその妻を他人と思い、もはや妻への愛を感じることができなくなっていたのです。

先にも九愛本の結末として、刀杖諍訟、無数の悪がこれより生ずることを学びましたが、愛はその目的達成のためには手段を選びません。それほど強い愛にもまた無常の相がひそんでいるのです。

夫の愛は純粹でした。他人の骨に自分の愛のすべてを

かけて、眼前に立つ我が妻をうつろな目でながめていました。ここにおいて、愛は最上の喜びであると同時に、また底知れない悲しみ、さびしさをもつものと言わなければなりません。

○

或は金谷の花をもてあそびて遅々たる春の日をむなしくくらし、或は南楼に月をあざけりて、漫々たる秋の夜をいたづらにあかす。或は千里の雲にはせて山のかせぎをととりて歳ををくり、或は万里のなみにうかびてうみのいろくづをととりて日をかさね、或は嚴寒にこほりをしのぎて世路をわたり、或は炎天にあせをのこいて利養をもとめ、或は妻子眷属にまとわれて恩愛のきづなきりがたし。或は執敵怨類にあひて瞋恚のほむらやむことなし。惣じてかくのごとくして昼夜朝暮行住座臥、時としてやむことなし。ただほしきままにあくまで三途八難の業をかさぬ。

登山状の名文です。その一一を申し上げるまでもなく、私ども人生の、そのままの姿を流麗な文に托して言われておるものでございまして、あまりに文が美しいがために、この文を我が身のつね日頃に置きかえて考えることをおこたりがちです。しかしながら私たちの日日の所作はこの文

に寸分たがいません。「妻子眷属にまとわれて恩愛のきづなきりがたし」であり、そのために「あせをのこいて利養をもとめ」ているのであり「ただほしきままにあくまで三途八難の業をかさね」ている毎日でございます。恐ろしいことです。

ここにおいて私たちはより高い愛、変ることなき愛を求めなければなりません。先ほどの妻が夫を愛する愛と、夫が妻を愛する愛には大変なへだたりがございました。この夫婦について、どちらが幸福であるかと言えば、妻の愛を信じ通して生きてゆくことのできる夫の方がより幸福と言わなくてはならないでしょう。けれどもそれは哀れな愛の姿と思われてなりません。

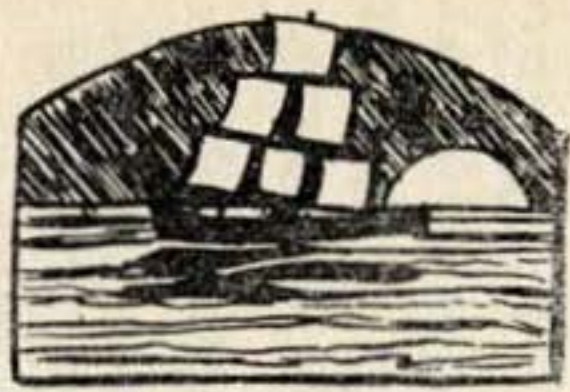
より高い愛、それこそ信仰の愛であり、変ることなき愛、それこそ阿弥陀さまの愛を感受することのできる信仰でなければなりません。三途八難の業をかさねる身をもしたりつくすことのできるみ仏の愛。法然上人のご詠歌に

仏法に逢いて身命を捨てると言へる事を

かりそめの色のゆかりの恋にだに

あふには身をもおしみやはする

とございますが、俗の愛のかなたにあるほんとうの愛を求めて生きたいものでございます。



ラムゼイ父子

細井善隆

(東京都江東区在住)

昭和三十年のこと、アメリカのロサンゼルスに住む一米人から、日本の交通公社本社へ一通の手紙がとどきました。

「わたくしは来る六月二十九日、APラインの貨物船にのってこちらを出発します。この船が横浜に停泊しているみじかい期間に、わたくしの父の記念碑をみたいと思います。たしか上野公園にあるときいております。また横浜にある両親の墓地に参詣いたしたいと思えますから、よろしくご案内をお願いします。」

わたくしの両親は一八八五年(明治十八年)三月、五日の間をおいて死去しております。当時二歳であったわたくしは、イギリスに送りかえされましたので、まだ日本へはいったことがありません。」

と記してあり、差出人はジョセフ・ラムゼイと署名してありました。交通公社がしらべてみますと、差出人はわが国海運界発展の上に大変功績のあったG・E・ラムゼイ氏の子息であり、当時七十二歳の老人であることがわかりました。

交通公社では早速この珍客の依頼に答えて調査をはじめました。ラムゼイ氏夫妻の墓地は横浜の外人墓地にのこっていることがわかりました。錨の形をきざんだ高さ二・五メートルもある立派なみかげ石の墓石が、一番高いところの外人墓地にたてられ、港をみおろしています。

いま一つの依頼の件であるラムゼイ氏記念碑は上野公園をくまなく探しましたが、見当りませんでした。この記念碑はたしかに明治十九年三月、上野公園に建てられたのですが、

その行方はわかりません。交通公社では期間もないので八方手をつくし、防衛庁関係にも調査を依頼しました。防衛庁ではラムゼイ氏が船長であり、防衛庁が発足以来昭和三十一年まで、江東区越中島の国立商船大学の校舎を借りていた関係上、同大学を調べたところ、大学校庭正門を入った左、塀よりのところに、高さ二・五メートル、幅一・五メートルの大きな記念碑が、いくたびかの震災にもかかわらず無事に残っていることがわかり、関係者をよろこばせました。

このラムゼイ氏記念碑は、もと上野公園に建てられていましたが、その場所が整地されることになって碑をうつすことになりました。このラムゼイ氏と大変ゆかりのふかい高等商船学校、いまの商船大学へ碑をうつしたものであります。

ラムゼイ氏はイギリス人にして、若いころから航海術を学び、十七歳のとき帆船にのり、四年後には一等士官となり、ついでインド海軍の艦長となって活躍するようになりました。ことに英清戦役には功績をのこし、のちインド沿海の船長、あるいはP・O会社の船長をつとめました。

明治初年のわが国は、西洋文物の輸入にいそがしく、とくに海運関係については先進国であるイギリスから技術を学び取りました。明治八年、三菱会社は汽船隅田丸をイギリスから購入しました。この隅田丸を回航して来たのが船長のラム

ゼイ氏でした。

以来ラムゼイ氏はわが国にとどまり、三菱会社の船長をつとめるようになり、明治九年、同社が三菱商船学校を経営した際、ラムゼイ氏は航海術の講師として、当時まだ発達していなかったわが国の海運界の技術指導に当りました。

明治十四年、ふたたび船長をつとめ、同十六年から管船局で海員試験の試験官としてつとめました。ところが明治十八年三月十八日、ラムゼイ氏夫人が急性肺炎にかかり、幼い八人の大勢の子供をのこして急逝されてしまいました。

人一倍愛妻家であるラムゼイ氏は異境の地に大勢の子供をのこして死去した妻の死を悲しみ、悲歎のあまりノイローゼになってしまい、五日をおいて三月二十七日、神田駿河台の官舎においてピストル自殺をして亡くなれましたが、当時死因は病死として報道されました。内外の人々に惜しまれ、政府は功労金千円を支出し、在留英国人葬によって手あつく葬られ、横浜の港の見える外人墓地に埋葬されました。

ラムゼイ氏は温厚篤実な人格者で、該博な知識の持主であり、学生の指導は懇切丁寧、教えをうけた者から慈母のように敬慕されました。このため指導をうけた者や関係者があつまって、ラムゼイ氏死去の翌年三月、当時商船学校助教授であつた高瀬成氏が碑文をつくり、大沼譲氏の筆によって、上

野公園にラムゼイ氏記念碑がたてられたものであります。

しかしラムゼイ氏両親の死後、八人の子供たちはラムゼイ氏の友人であるマクナブ氏の世話によって、二人の日本人女中につきそわれ、生れ故郷の日本の土をはなれ、イギリスに送還され、祖母や叔母の手によって育てられました。

明治二十四年には一家をあげてアメリカにわたり、カルホルニヤ州サンディゴで農業をはじめ、明治三十三年にはロサンゼルスにうつり住むようになりました。その後、息子ジョセフ・ラムゼイ氏は勤め人となり、明治四十一年、アーデン・ファーム会社に入り、昭和二十九年同社を退社されました。しかし経済的にあまり恵まれず、その上妻子もない淋しい生活を送られ、当時六十二歳のながい生涯、夢に画いていた生れ故郷日本を訪れることがただ一つの生涯の希望でありました。幼いときに死別した両親の墓参をすることを生涯の望みとしておられました。

経済的にあまり恵まれていないラムゼイ氏は客船にのって、日本を訪れる余裕がないため、昭和三十年六月二十九日、貨物船プレジデント・ジョンソン号にのり、サンフランシスコ港を出航し日本に向い、七月十六日、横浜港に入港しました。

日本では商船大学と同校の先輩たちがラムゼイ氏歓迎の準備

をすすめました。当日午後六時、ラムゼイ氏をのせたジョンソン号は横浜港に錨をおろしました。商船大学の井関学長、矢崎海務学院長、森海洋会副会長、滝川横浜海難審判長らと新聞記者団一行が、ジョンソン号にランチをすすめ、ラムゼイ氏を出迎えました。

ただ両親の墓参と生れ故郷日本の土をふみたさに訪れた白髪長身のラムゼイ氏にとっては、この歓迎はあまりに突然のことであつたためおどろかれました。ジョンソン号の人たちも盛大な歓迎陣にびっくりされました。ラムゼイ氏は歓迎陣の説明を聞いて、今更のように父ラムゼイ氏の偉業を偲ぶとともに、日本の関係者の温い歓待に心から感謝されました。一行はラムゼイ氏を案内して、ただちに横浜の外人墓地に到着。そこでラムゼイ氏は初めてまみえる両親の墓に、涙を光らせながらながい黙祷をつづけられました。

そしてその夜は海洋会主催によるラムゼイ氏歓迎会を盛大に催し、翌日七月十七日、商船大学の教官たちの案内でラムゼイ氏を都内見物にさそいました。神田駿河台では自分がそこで生れ、上野公園では父の記念碑がたてられたことなどを聞かされ、ラムゼイ氏は感慨無量のおももちでした。

その翌日七月十八日、母親であるラムゼイ氏夫人命日の日に、商船大学の記念碑の前で、盛大な碑前祭が挙行されまし

IN MEMORY OF
 G. E. O. Ramsay
 MASTER MARINER
 This Stone is erected by His Pupils
 as a Token of Respect and Admiration
 for His Sterling Qualities

ラムゼイ氏記念碑題字の一部の拓本

—国立商船大学校庭（東京都江東区越中島）—

た。当日午後、運輸大臣をはじめ、海洋会長、商船大学学長、同大学職員、同大学学生全員が参列し、大臣からは七宝の花瓶、海洋会から富士の絵と舞扇、商船大学から墓碑と記念碑の拓本を表装した記念品など数々がラムゼイ氏に贈られました。ラムゼイ氏は最後に壇上にあがって、お礼の言葉をのべられました。

「わたくしは両親の墓参に來ただけです。それなのに大臣をはじめみなさんにご臨席賜り、このような盛大な碑前祭がおこなわれるなどとは夢にも思っておりませんでした。わたくしの七十二年の生涯の中でただ一つの願いは、日本でなくなつた両親の墓参をしたいことと、生れ故郷の日本の土を踏んでみたいことでした。このたびこのことが実現したことだけでわたくしの年来の望みは果たされましたのに、このように盛大な歓迎をしていただいております。その上立派なお土産をたくさんいただいて、なんとお礼申しあげてよいやら、ただよろこびで胸一杯です。」

と、涙ながらに感激の挨拶をされました。

この日の碑前祭の情景をNHKラジオが録音し、七月二十日海の記念日にアメリカ向け海外放送として全米に伝え、これを聞いたアメリカの人々に大変な反響をあたえました。

ラムゼイ氏は帰国後、日本での歓待の感激が忘れられず、

商船大学に礼状を出しました。その礼状の末尾に、

「わたくしには財産は何一つありません。生命保険が五百ドル（約十八万円）かけてありますが、わたくしの死後、この金を亡父ゆかりの商船大学に寄付をいたす手続きをとっておきましたから受取って下さい。」

と、記してありました。貨物船でなければ日本へ来れないほど経済的に恵まれず、妻子もない七十二歳の老人にとって、このことがこの世の最後の願いであり、よろこびであるうかと関係者を感激させました。

（ハガキでひとこと）

暑さと私の健康法



一 瀬 直 行

（東京都台東区在住）

日本の関係者は、ラムゼイ氏が日本海運界の発展の上にくされた功績が、のち日本が七つの海に活躍する、海洋国日本の素地になったものとして感謝し、その子息のラムゼイ氏の訪日を歓待したのです。このことがどんなにラムゼイ氏の心をうごかし、商船大学へ財産のすべてを寄付する感謝の心となつてあらわされたものであります。感謝報恩の心は、海を越え、国境を越え、民族を越えて人々の心の中に温くひろがっていくものであります。

都会の暑さをのがれて涼しい避暑地に行ったことはありません。

学生の頃は、大森海岸とか、逗子あたりの海へよく泳ぎに行きました。年のせいか、夏の暑さより冬の寒さの方が身にこたえます。そのくせ耳のちぎれるような寒風にさらされることも嫌いではありません。これという健康法はありませんが、上手に昼寝するようにつとめております。

きりぶち 輝

東京都練馬区在住
童話作家

昼は汗をふきふき働き、夜は雨戸をあけはなしたまま蚊

帳の中で寝る……つまり、自然にさからわない生活をした
いとは思うが、現実はどうも肉体のほうに文明病におか
され、冷房完備の部屋にとじこもりがちだ。

これではいかぬと一念発起し、午前中は西側の部屋、午
後は台所へと仕事場を移し、ぬれタオルで頭を冷やして仕
事、仕事……。

だが、夜は虫の襲来激しくまったくお手あげのていたら
く。そこで仕事は打ち切り、魚河岸のマグロのように横に
なり、テレビを見ながら早寝休息。そして、昼寝も一時間
はたっぷり、模範的な小学生なみの生活。

まあ、これが理想だが凡夫の悲しさ、しばしば生活テン
ポの狂うこともある。ともあれ、夏は暑いがよろし。その
うち涼風の吹く秋も間近い。

皮膚の鍛錬は健康の礎

野村 宗春

(東京都港区在住)

夏は暑さに伴い体内の発汗作用が活発に働きます。従っ
てスタミナを消耗し、体力が弱り諸器官の活動が鈍ってま

いります。そこで先ず自分の体力と抵抗力を十分自覚する
ことが必要です。自分の体力に稍強すぎると感じられる鍛
錬を順次加えて行きます。

山間、海辺の空気は新鮮で酸素やオゾンに富み、太陽光
線中の紫外線が強く働きます。皮膚に間断なく刺激を与え
ると、その鍛錬によって皮膚の抵抗力を増強し、体内の重
要器官を保護することによって、健康を倍增することは間
違いありません。

夏は冷水、乾布摩擦、日光浴によって皮膚増強の療法に
入る絶好の季節です。山に海にゴルフに出かけましょう。

藤井 正雄

(東京都葛飾区在住)

「暑ければ暑いがよろし」「身頭減却すれば火もまた涼
し」といった名僧の心境には浅学の身には仲々到れません
が、暑さに逆わず順応するよう心がけています。普段閉じ
こもりがちですので、一掃除、二勤行、三学問と、大いに
身体を使って調査にでかけたりして秋に具えること、これ
が今夏の私の健康法です。

お焼香について



福西賢兆

(大正大学実践仏教講師)

「方丈さん、一寸お伺いしますが、お焼香は一遍ですか、それとも三遍するのが正しいのでしょうか？」

「お線香は一本あげればよいのでしょいか？」

「いや、あれは二本あげるのが本当だよ」
こんな質問を檀家の人達から始終聞きます。

お焼香の回数、お線香の本数にも、それぞれ意味がありますが、要はその人の心の持ち方に問題があるのではないのでしょうか。しかし、お作法が解らずじまいでは困りますから正しいお焼香のお作法をお教えしましょう。

焼香は、仏教の儀式の中で欠くことができない大切なものであります。智度論というお経の中には、香は仏の使いなりといっていますから、灯明、供花で仏前を荘厳すると共に身心を浄め、更に静かにおちつかせ、(禪定)貪欲、瞋り、愚痴の三毒を払い、清々しい身と心で、み仏をお迎えすることが出来ます。



焼香の作法は、まず目的の本尊前又は牌前に進み出で、恭々しく目を聖容に注ぎつつ上品の一礼、即ち合掌のまま静かに上体をかがめ、両掌を仰向けて、両耳の辺りまで持ち上げ、み仏のおみあしを頂く接足作礼という礼

拝をいたします。

次に、右手で香盒の蓋を執り、右指先で香をつまみ、左掌を仰向けて、ひたいの辺りまで頂き、静かに香炉に焚焼します。

胸前に合掌をして、戒名又は志す所の靈位の冥福を祈り、お十念を称え合掌のまま深く低頭し称え終ってから、香盒の蓋をし、更に上品の一礼をして席にもどります。

年回法要の時等で、お導師がおいでのなる時は焼香の往復にお導師に向って一礼ずつ行うのが正しいお作法です。

告別式等の椅子席の場合は、立礼で結構です。尚、引きつづき焼香がある時には香盒の



くなりますから一本にきめましょう。

線香の先を少し折って灰に入れると真直ぐ立ちます。



昔から抹香くさいという言葉があつて、良い意味に用いられませんが、抹香は、櫛の粉で作った粉抹のお香で消毒用としても用いられますが、寺院では長時間お香を焚くための常香盤の中に幾重にも条数を作つて抹香

蓋をしめる必要はありません。常香盤等の香炉に蓋がある時は、両手で執り、焼香の後、香炉の蓋をしめるのを忘れないようにします。普段日常のお仏壇のお給仕には、香炉に沈香や五種香を焚すことはいりません。お線香をあげますが、良い香りのするものを用意しましょう。

お作法は、焼香と同様です。本数は、一本は一心、二本は戒と定、三本は貪、瞋、痴とそれぞれ意味がありますが、長さ間隔が違ふとお詣りしながら気になるので心が散りやす

を敷きます。その上に良い五種香をのせて火を端につけますと一日中煙がたえません。抹香は火の役目をするので、それだけ焚していいたのでは良い香りができませんから、香惜しみの為に悪口をいわれるようになったのかと思われまふ。吾々、教界人の反省しなくてはならぬ点であり、皆様も良いお香を用いて下さい。

世界の色々な宗教で焼香を行いますが、植物性のものを特に用いることが仏教の特色であります。即ち、沈香等のうもれ木とか、白

檀等の香木を用い、五種香等の乾燥した香を焚焼することとあります。植物性の香を用いることは、殺生を戒しめる仏教としては、至極当然であり、特に性欲に狂つて人生を破滅することがないようにとの仏様の配慮であり、殺生、不邪淫の両戒を保つ為の実践行であります。焼香することの意味は、以上のような教団内の僧俗の規律を保つ為のみでなく、精神的には、貪り、瞋り、愚痴の三毒を払い清浄な身と心に立ちかえり、一念に向う求道者の心構えができるといえましょう。

お経の最初に、

願我身淨如香炉

願我心如智慧火

念念焚焼戒定香

供養十方三世仏

戒香定香解脱香

光明雲台遍法界

供養十方無量仏

見聞普薰証寂滅

と説かれております。

み法の真意を味いながら、三世という超時間、十方という超空間に遍満する無量寿仏の廣大なる、みいのち、みひかりにお十念をいたしましょう。



南洋に寺を建てた惠薫尼

高橋良和

もう五年も前のことである。

海外への往来の激げしい東京羽田の国際空港の待合室で、法衣姿の尼僧が荷物を整理してジェット機に乗り込んでゆく姿を見送った。

法衣をまとっての海外旅行だから、全く異色のように思うが、この尼僧さんは、ついこの間も、ヨーロッパからかえってきた洋行がえり、それからほんのわずかさすぎたの海外への旅なのである。

行先は一体どこなのだろうか。

物見遊山の見物の物腰でないことは、百も承知出来るが、一体どの方面に出かけるのだろうか。

この尼僧さんは京都の西岸寺の井上慈慶尼で思い立っての

南洋サイパンの慰霊行なのである。

一体、サイパンまでなにに出かけるのですか。
とたずねてみると、井上さんのこたえは、ひとことであつた。

あのね、先代が、南洋に関心をもつてられましたので、今度の戦争で破壊されました南洋寺のあとでもみて、亡き先代を偲ぶのです。

ということであつた。

井上さんのいう先代の南洋への思いというのは、どんなことを意味するのであろうか。

京都は尼僧の多いところである。

そのなかでも、この井上さんの、師匠である井上惠薫尼は

氣骨のある人であった。

明治五年九月十四日に、奈良県の帶解町で生れているが、今は天理市に編入されている。

一家が信仰ある家庭であったとみえて、九才で得度している。寺は奈良市誕生寺で、その寺の住職である、異香慈薫尼の弟子となつたのである。

そうして、それから十五年すぎた明治二十九年に京都の西岸寺の石山諦良尼の弟子となり、大正八年に師匠のあとを継いで西岸寺に住職しているのである。

この当時、西岸寺は、京都市下京区朱雀北の口町にあったが、同尼はこの西岸寺を今の朱雀分木町に新築移転をやりあげている。

この惠薫尼に若いころから念願があつた。

一生のうちに三ヶ寺を建てたい。これが一つの誓いとなつてあらわれて、まず一ばんはじめに西岸寺。更にもう一ヶ寺自分が兼努する普恩院の復興につとめたのである。

もう一つの寺はどこであつたろうか。

当時の浄土宗は、宗務所が増上寺の前の明照会館にあつたので、執綱といわれる一宗の代表は野上運外氏であり、教育部長に江藤淑英氏が就任していた。

たまたま南洋の開発が進捗して、サイパン、ロタ、ポナペ

などに東本願寺が布教しはじめると、浄土宗もそれにならつて南洋開教を計画したときである。

江藤教学部長は、早速南洋の開教事情を調査するというところで、昭和十一年この南洋視察に赴いたのである。

飛行機などまだ利用されないところに、何日かをかけて、南洋の視察を終えたのであるが、そのとき江藤教学部長の腹では、

せめて、サイパン島の南洋寺を中心に、ここに寺を新設したい、まず、サイパンは南洋の中心であり、この島の開発に赴いている人々のなかには、内地の本宗檀信徒が多い。と、知った江藤教学部長は、何日かの視察の旅からかえつてくると、すぐさま、この井上惠薫尼の西岸寺を訪ねたのである。

実は、宗門来が将、のびるためには、南の方に教線拡張をしなければなりません。一宗としても開教についての予算があるわけではない。

と、開教事情を報告すると惠薫尼は、重い口を開いたのである。

わたしで出来ますとなら、おっしゃってくださいませ。

この返事に、江藤教学部長は、

井上さん、南洋に寺を建立したいのです。現在仮住居のサ

イパンに浄土宗の寺を。

なかなか熱情のある江藤教学部長だけに、例の早口で、惠薫尼にたのんだのである。

江藤さん、わたしは一生のうちに、三ヶ寺を建てたいと思ってます。それで普恩院と西岸寺はなんとか復興しましたが、あと一ヶ寺はどこにしようかと思っている矢先です。よろしゅうございます。

という、つかつかと立って、次の間に入ったのである。

江藤教学部長は、惠薫尼の出てくるのを待っていると惠薫尼は、愛用の小もの入れから、

あのね、尼僧の身でなにも出来ませんが、ほんの新築の足しにしていたら。

といいながら、ありあわせの紙につつんでさしだしたものがあつた。江藤教学部長は、惠薫尼の好意に甘えて、

いいやどうも、御協力ありがとう。

と、おもむろに、紙づつみをあけてみると、なんと、手の切れるような紙幣で三千円がつつんであつた。

さすがの江藤教学部長も、ことばがつまって出ない。当時は百円札をおがんだほどねうちがあつたからそれで三千円である。

それもそのはずである。昭和十一年の三千円というと、今

の価値にすると、二千万円は大丈夫である。

一尼僧がなんの惜し気もなく、さし出した三千円に、江藤数学部長は涙して、それをおしただいたのであつた。

この金がもとで、建設が出来たサイパン島の南洋寺は、初代の主任に青柳是孝氏が赴いて、それからロタ、ポナペの両島に教線を張ることになるが、それが一尼僧の寄付した三千円から生れたのである。

惠薫尼は、そんなことを他人に語る人ではなかった。

ただ黙々として布施行をはげむ、市井の一尼僧であつたけれど、この献金は宗門の南洋開教への大きな布石となつたのはもちろんである。

この惠薫尼は更に、日華事変から大東亜戦争へと、数々の慰問と、恤兵に力をつくし本宗尼僧が献じた愛国機吉水号にも多数の献金をしているのであるが、その南洋寺は、今は跡かたもなく破壊されて、わずかに門柱を残すのみであつた。

その弟子の井上慈慶尼は、老師匠が志をたてながら、遂に踏めなかつたサイパンの南洋寺を訪ねて去来するものはなんであつたらうか。

一生を教化と、念仏のうちにすごした惠薫尼の心は、このサイパンの南洋寺に今も残っていることであらう。

額 鏡



雪 微 田 合
(住 市 府 防 口 山)

応接間に鏡を掲げてみたら、如何なものであろうか。

光の反射で室内が明るくなるばかりでなく、静かにそれに向えば、我々の心の奥底まで嘘偽りなく、映し出してくれるだろう。

拙宅の粗末な応接間では、嫌でも応でもこの鏡との対面を余儀なくされているが、またここは親しく小生の、書斎兼用にもなっている。(否、客人のご注文で、書斎を応接間にして仕舞ったという方が、正しい)

なお欲といえ、その鏡面の一隅に、筆数少く美しい絵でも描かれていたら、と思う。

絵画芸術の役割りが、もともと自己表現にあ

ってみれば、家人の考えを押しつける様な、自筆の物などは避け度い。出来得れば、崇敬する巨匠の作品など、更に効果的だろう。その端的非凡なタッチが、金言として胸に訴えようから。

かくすれば、とかく鏡を覗き度がらぬテレビの仁も、つい面をあげることに必定。これで、自分の心の姿を見る鏡の役と、人に学ぶ額の役目との、両方が兼ねられる訳だ。絵は何もキャンバスや紙、絹などに描くものとは限らない。

また世に、大慈大悲ならぬ懲罰懺悔を強いる宗教もある様に、絵ならぬ絵の何と一人前

顔をし、本当の絵の邪魔をしている事か。

そこで、なまじな人の手による絵より、むしろ純真な児童画の方が優れている。と小生は思う。その天衣無縫、豊かな創造の力量は、時として巨匠も進んで手本と仰ぐ事もあるろう。

子供は本来穢れというものを知らぬ、貴重な大人の前身でこそあれ、決して未開劣等な存在では無い筈である。我々はもっと子供の前で襟を正すべきで、敢えて言おうなら、児童画は御仏の絵であると思う。

己が懷中鏡で、上から下から、或はまた斜に、他人を冷たく映し見るよりも、片隅に児童画の描かれた鏡額を高々と掲げ、その前で共に肩を並べて立ち、互いに讀え合い鑑鑑とし合う方が、我々の生活をどれ程明るく、そして正しくするか知れない。と思うが如何なものであらうか。

伺 御 中 暑

熊本市九品寺三丁目一ノ一

鎮西学園長

上田 貞雄

真仏教舎本部 会長

裏辻 賢洲

福岡市外福岡町
松原山大善寺住職

天光院

真野 竜海

京都市左京区岡崎円勝寺町五

家政学園長

三枝樹 正道

函館市称名寺

住職 武藤 善友

執事 須藤 隆仙

京都市東山区古門前通東山線西入

華頂庵

株式会社 安藤

代表取締役 安藤 宇助

京都(075)五二一〇六九番(法衣)
五二一〇三番(仏具)

香川県高松市仏生山町

法然寺

細井 照道

だん王法林寺

信ヶ原 良文

京都・三条大橋東詰

長崎市鍛冶屋町

大音寺

本原 義岳

静岡県富士宮市東町三一二八

大頂寺

石井 真峯

電話(0544)六二四六番

静岡市日吉町二一二

華陽院

堀田 良謙

法然上人鑽仰会

伺 御 中 暑

稲岡 覚 順

川口市北町二―五〇
西 福 寺

浄土宗議會議員
知恩院顧問

栗 本 俊 道

東京大塚西信寺住職

浄土宗議會議員

西住院住職

戸 川 靈 俊

京都市左京区黒谷町三〇

浄土宗議會議員

井 原 文 雄

山口県柳井町柳井津 瑞相寺

浄土宗議會議員

柴 田 敏 夫

横浜市港北区菊名町五二二
菊 名 山 蓮 勝 寺

浄土宗議會議員

光運寺住職

飯 田 信 弘

三重県四日市市中部三

神奈川県葉山町堀内五六八

相 福 寺

明照幼稚園

杉 田 義 俊

光明寺住職

白 幡 憲 佑

横浜市南区庚台久保山

「浄土」講読規定

一部 定価 六十円

会費一力年 金七二〇円

(送料不要)

浄 土 八 月 号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年七月二十五日 印刷

昭和四十四年八月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮 林 昭 彦

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

伺 御 中 暑

総本山 知恩院 門主 岸 信宏 執事長 鵜飼隆玄	浄土宗宗務庁	浄土宗務支所	大本山 増上寺 法主 椎尾弁匡 執事長 里見達雄	大本山 百万遍知恩寺 法主 神居琳応 執事長 清山善信
大本山 善光寺大本願 法主 一条智光 副住職 鷹司誓玉 執事 早川利雄	大本山 光明寺 法主 大野法道 執事長 吉川哲雄	里見達雄	東京都文京区小石川三―十四―六 伝通院住職 大河内 隆弘	
鎌倉大仏殿 高德院 佐藤密雄	祐天寺住職 巖谷勝雄 東京都目黒区中目黒五―二四―五三 TEL (712) 〇八一九 〒153	梅窓院 中島真孝 中島真哉 東京都港区南青山二―六―六	近竜寺住職 松濤弘道 栃木市万町二―一―四 電話 (0282) 22033番	